

ラオス語

鈴木 玲子

(東京外国語大学助教授)

1. ラオス語の使用地域と人口

1.1 名称

「ラオス語」は、ラオス人民民主共和国（以下、ラオスと称す）の主要民族であるラオ族の言語なので「ラオ語」と言うこともある。また、現地語で「pháasǎa láaw」（「pháasǎa」は「言語」、「láaw」は「ラオス」と言い、その発音から「ラーオ語」とも言う。1991年に制定されたラオス国憲法第9章第75条に「ラオ語及びラオ文字が公式に使用される言語及び文字である」と記載されているように、ラオスの公用語である。ここでは、ラオス国内のラオス語の発音を学ぶので、ラオスの国語という観点から国名をとって「ラオス語」と呼ぶ。

1.2 使用地域と人口

ラオスおよび東北タイ地方（＝イサーン地方）が主な使用地域である。話者人口は、ラオス国内に約500万人いるとされているが、これにはラオス語を母語としない話者も含む。また東北タイで日常話されている東北タイ方言（＝イサーン語）は、文字を持つラオス国内のラオス語とは若干の違いがあるものの、実際にはラオス語の一種であり、その話し手は約2400万人いると言われている。さらにはフランスやアメリカなどに移住した話者が約20万人いると言われている。

2. ラオス語の規範・方言概略

2.1 ラオス語の規範的発音

規範的であると公に規定されていないが、首都ヴィエンチャンの発音が標準的だとする考え方が近年浸透してきている。5、6年前よりテレビのアナウンサーの発音もヴィエンチャン発音に矯正して発音しているようになっている。

2.2 ラオス語の方言

ラオス国内のラオス語と東北タイのラオス語はもちろん、ラオス国内におけるラオス語も、地域差、すなわち、方言差は全体としてとても著しい。各地域のラオス語は、ラオス人同士でもわからないことがあるようで、同音異義語を利用した笑い話があったりする。

そもそもラオスには「一方言」という言い方自体があまり一般的ではなく、普段は「一(県名・村名)の発音」という言い方をする。ラオス国内における方言の分布状況と各方言の特徴については未だ明らかにされておらず、その詳細は今後の調査を待たなければならない。聴覚印象は、一般に、北方言は、聞いた感じが優しく、口調もゆっくりしている。一方の南方言は、対照的に口調が速く、きつい感じがすると言われる。

例えば、「どこ」という語を例にとっても次のようにいろいろある。

例)「どこ」ルアンパバーン	/sāu/	(高いところから下がってその後少し上がる声調)
サムヌア	/sǎə/	(高いところから下がってその後少し上がる声調)
ヴィエンチャン	/sǎy/	(低いところから上がる声調)
チャンパーサク	/sây/	(高いところから下がる声調)
セーコーン	/sidǎə/	
		(siはごく普通の高さで、dǎəは低いところから上がる声調)

さらに最近では、タイ語の語彙がマスメディアを通じて急速に流入している状況にあり、その結果、地域差の他にそれを採り入れる若年層とそうでない年配層との間に年代差も生じてきている。

3. ラオス語の音節

ラオス語は単音節声調言語である。基本的な語は、ほとんどが一音節語で、音節全体に音の高低の調子である声調がかかる。音節はまず次の三要素に分けられる。

- 1) 頭子音：音節初頭の子音
- 2) 韻：音節主核母音と任意的な音節末子音からなる。母音が長母音、あるいは二重母音のときは末子音は任意であるが、短母音の時は原則として常に末子音を要求する。
- 3) 声調：1)、2)の全体にかぶさる超分節的特徴。

ラオス語の音節構造は、頭子音を C1、短母音を V、長母音あるいは二重母音を VV、末子音を C2、声調記号を T とすると、次のように書き表すことができる。

C1VC2/T	→	/bún/	→	ບຸນ	「祭」
C1VV(C2)/T	→	/bāan/	→	ບ້ານ	「村」

(C2は任意)

声調の分布を考える際に、ただ母音の長短や末子音の有無だけが問題なのではなく、「平韻」と「促韻」の区別が重要である。平韻とは、末子音がゼロか、もしくは/m,n,ŋ,y,w/のいずれかである韻、促韻とは、末子音が/p,t,k,ʔ/のいずれかである韻である。平韻を持つ音節を「平音節」といい、促韻を持つ音節を「促音節」と言う。この点については、後

の 6.4(2)で詳述する。

4. ラオス語の母音と子音

4.1 母音

(1) 母音体系の概略

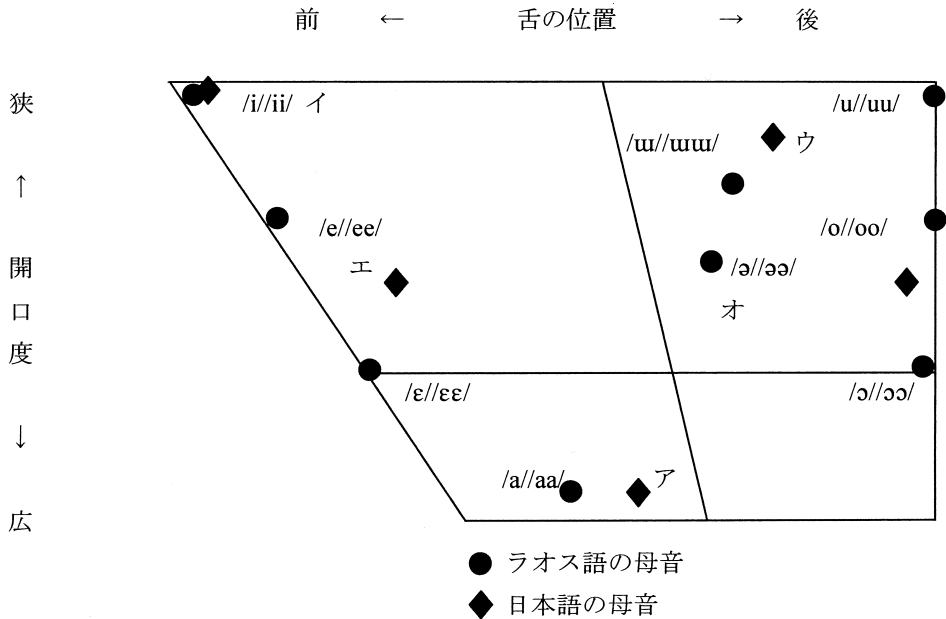
基本母音は 9 つで、それぞれに長短の対立がある。また、二重母音は 3 つで、基本母音と同様に長短の対立がある。ただし短二重母音は、オノマトペや中国語からの借用語など、ごくわずかな例にしか使用されない。

(2) 音素目録

音素	音声とその環境	用例
《前舌母音》 /i/, /ii/ /e/, /ee/ /ɛ/, /ɛɛ/	[i],[ii] 張唇の前舌狭母音。[i]の方が[ii]よりも舌の高さがやや低い。 [e],[ee] 張唇の前舌半狭母音で、舌の高さは基本母音 No.2 と同じか、やや高め。[e]の方が[ee]よりも舌の高さがやや低い。 [ɛ],[ɛɛ] 張唇の前舌半広母音で、舌の高さは基本母音 No.3 とほぼ同じ。[ɛ]の方が[ɛɛ]よりも舌の高さがやや高い。	[mit33] ມິດ 「友好, 静かだ」 [miit52] ມິດ 「包丁, ナイフ」 [het45] ເຫັດ 「キノコ」 [heet21] ເຫັດ 「原因」 [pɛʔ45] ພື້ນ 「びったりくっつく」 [pɛɛ25] ພື້ນ 「平ら」
《中舌母音》 /ə/, /əə/ /a/, /aa/	[ə],[əə] 弛唇の中舌半狭母音。 [a],[aa] やや張唇の前舌ないし中舌の広母音。[a]の方が[aa]よりも舌の高さがやや高い。	[phəʔ33] ພີ້ນ 「泥んこの」 [phəə25] ພີ້ນ 「ぼんやりする」 [tɕan25] ຈັນ 「月」 [tɕaan25] ຈານ 「皿」
《後舌・非円唇》 /u/, /uuu/	[u]~[ɣ], [uuu]~[ɣɣ] 張唇ないし弛唇の、後舌で、広めの狭母音か、やや狭めの半狭母音。[u]ないし[ɣ]の方が[uuu]ないし[ɣɣ]よりも低い。 [ə],[əə] 促音節のときには舌の位置が前寄りになる。	[khuun21]~[khyɳ21] ຂຶ້ນ 「上がる」 [khuuu25]~[khyɳɳ25] ຂຶ້ນ 「反抗する」 [ləp45] ລືບ 「(消しゴムで) 消す」 [ləəp52] ລືບ 「はがれる, むける」
《後舌・円唇》 /u/, /uu/	[u],[uu] 円唇の後舌狭母音。両唇を丸く突	[dut45] ດູດ 「地面を押して掘る」

<p>/o/, /oo/</p> <p>/ɔ/, /ɔɔ/</p>	<p>き出すと言うよりも，上唇が下唇に覆いかぶさるように両唇をすぼめて下顎を緊張させるような印象がある。[u]の方が[uu]よりも円唇化が弱く，下の高さはより低い。</p> <p>[o],[oo] 円唇の後舌半狭母音で，舌の高さは基本母音 No.7 とほぼ同じかやや高め。</p> <p>[ɔ],[ɔɔ] 円唇の後舌半広母音で，舌の高さは基本母音 No.6 とほぼ同じ。</p>	<p>[duut21] ดูด 「吸う」</p> <p>[khon34] คน 「人」</p> <p>[khoon34] โคน 「幹(根元の方)」</p> <p>[phɔʔ33] เพราะ 「なぜならば」</p> <p>[phɔɔ33] พ่อ 「父」</p>
<p>《二重母音》</p> <p>/ia//ua//ua/</p>	<p>[iə][ua][uə] いずれも第一母音が若干長めの二重母音。</p>	<p>[miɔʔ34] เมຍ 「妻」</p> <p>[muɔʔ34] เมื่อย 「帰る」</p> <p>[muɔʔ34] มืด 「薄暗い」</p>

(3) 母音図による表示



(4) 母音の特徴

/e/, /ee/, /ɛ/, /ɛɛ/, /ɔ/, /ɔɔ/, /o/, /oo/はいずれも相対的に口の開きが狭い。また，/u/, /uu/の舌の位置が低く，/ə/, /əə/と非常に接近している。

4.2 子音

(1) 子音体系の概略

子音は全部で 20 あり、すべてが頭子音として立ちうる。/p/、/ph/、/t/、/th/、/k/、/kh/ という無気音と有気音の対立がある。末子音は、/p, t, k, ʔ, m, n, ŋ, w, y/ の 9 子音である。また、子音字連続形式はあるが、音韻としての子音結合は存在しない（後述 6.4 (3)）。

(2) 子音音素目録

音素	音声とその環境	用例
《破裂音》		
/p/	[p] 両唇の無声無気破裂音。	[paɪ25] ɰ 「行く」
/ph/	[ph] 両唇の無声有気破裂音。	[phaɪ25] ɰ 「誰」
/b/	[b] 両唇の有声破裂音。	[baɪ25] ɰ 「葉」
/t/	[t] 歯裏の無声無気破裂音。	[taɪ25] ɰ 「這う」
/th/	[th] 歯裏の無声有気破裂音。	[thaɪ25] ɰ 「耕す」
/d/	[d] 歯裏有声破裂音。	[daɪ25] ɰ 「どの」
/c/	[tɕ] 歯茎硬口蓋の無声無気破裂音で、調音域が広いため、やや破擦音的。	[tɕaɪ25] ɰ 「心」
/k/	[k] 軟口蓋の無声無気破裂音。	[kaɪ25] ɰ 「遠い」
/kh/	[kh] 軟口蓋の無声有気破裂音。	[khaɪ25] ɰ 「開ける」
/ʔ/	[ʔ] 声門閉鎖音。	[ʔaɪ25] ɰ 「咳をする」
《鼻音》		
/m/	[m] 両唇の鼻音。	[mat33] ɰ 「縛る」
/n/	[n] 歯茎の鼻音。	[nat33] ɰ 「約束する」
/ɲ/	[ɲ] 歯茎硬口蓋の鼻音。	[ɲat33] ɰ 「つめこむ」
/ŋ/	[ŋ] 軟口蓋の鼻音。	[ŋat33] ɰ 「押し開ける」
《摩擦音》		
/f/	[f] 下唇の後面と前歯の前面の先との間の唇歯の摩擦音。摩擦はあまり強くない。	[faɪ25] ɰ 「ほくろ」
/s/	[s] 摩擦のやや強い歯茎ないし歯裏の摩擦音。 [s] 後続母音が /i/, /ii/ のときは常に歯裏の摩擦音。	[saɪ25] ɰ 「透明だ」 [sii25] ɰ 「色」
/h/	[h] 声門の無声摩擦音で、通常、後続母音を鼻音化する。	[haɪ25] ɰ 「陶製のつぼ」

《側面接近音》 /l/	[l]歯茎の有声側面音。	[laɿ25] ທຸ 「流れる」
《接近音》 /w/	[w]唇の突き出しの少ない両唇の半母音ないし弱摩擦音。	[waɿ25] ທຸວ 「できる」
/y/	[vi:]～[vi:]有声唇歯摩擦音で、後続母音が/i/, /ii/のときは摩擦をよく伴う。 [j]硬口蓋の半母音ないし弱摩擦音。摩擦はないか、あっても非常に弱い。	[wii34]～[vii34]～[vii34] ຜີ 「扇子」 [juu33] ຍີ່ 「いる, 在る」

(3) IPAの子音一覧表による表示

	両唇	唇歯	歯 歯茎 後部歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	喉頭	声門
破裂音	p ph b		t th d c		k kh				ʔ
鼻音	m		n		ɲ	ŋ			
摩擦音		f	s						h
側面接近音			l						
接近音	w				y				

(4) 子音の特徴

/p,t,c,k/はいずれも硬音 (fortis) で、閉鎖が硬く、破裂は急激である。ただし/?/は/p,t,c,k/と比較して閉鎖も破裂もやや緩やかである。一方、/ph,th,kh/はいずれも軟音 (lenis) で、閉鎖はゆるく、破裂も緩やかである。/m,n,ɲ,ŋ/のいずれも閉鎖が強いためか、解放の際、弱い破裂的な反響音 (percussion) が聞こえることがある。また、末子音/p,t,k,ʔ,m,n,ɲ,w,y/のうち、/p,t,k,ʔ/はいわゆる内破音、すなわち閉鎖のみで破裂しない無破裂閉鎖音である。以下に末子音の最小対立例を示す。

/p/ : /sap/ 「富・財産」 /t/ : /sat/ 「突き刺す」
 /k/ : /sak/ 「引っ張る」 /ʔ/ : /saʔ/ 「(頭を) 洗う」
 /m/ : /sam/ 「等しい」 /n/ : /san/ 「震える」
 /ŋ/ : /saŋ/ 「命ずる」 /w/ : /saw/ 「貸貸する」
 /y/ : /say/ 「入れる」

5. ラオス語の声調

(1) 声調体系の概略

ラオス語の声調は5つとも6つとも言われていて、地域差が著しいが、その中でも、首都ヴィエンチャンの発音が標準的であると認められつつある。ヴィエンチャン方言の声調

は5つである。

(2) 声調素

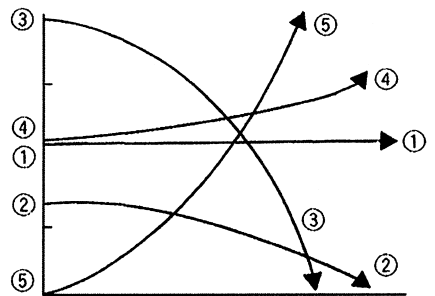
次に示す[]内の5段階数字は、相対的な音の高さの幅を5段階に分けて表したもので、1が低域、2が次低域、3が中域、4が次高域、5が高域を表す。

音素	音声とその環境	用例
/ /	[33] 中平調で、やや高めの中域に始まり、そのまま平らに持続する。	[khaa33] ခါး 「価値」
/ ˋ /	[21] ~[31] 低降調で、やや低めの中域、ないし次低域に始まり、低域まで緩やかに下降。	[khaa21~31] ခံ်း 「殺す」
/ ˆ /	[52] 下降調で、高域から次低域あたりまで一気に下降。	[khaa52] ခံ်း 「商う」
/ ˊ /	[34] 音節が平音節のとき、中高調で、中域に始まり、次高域までわずかに上昇。 [45] 音節が促音節のとき、上昇調で、次高域に始まり、高域までわずかに上昇。	[khaa34] ခါး 「とどまる」 [khat45] ခံ်း 「磨く」
/ ˋˋ /	[25] 上昇調で、次低域に始まり、高域まで緩やかに上昇。 [22] ~[23] 切れ目なしに後続音節が続く位置では、低平調と低昇調が自由変異的に現れ、低平調[22]であることが多い。	[khaa25] ခါး 「脚」 [laŋ25] ခံ်း 「背中」 [laŋ22~23 khaa34] ခံ်းခါး 「屋根」

(3) 図による表示

声調の音声学的曲線は次のとおりである。

- ①/ / : [33]
- ②/ ˋ / : [21] ~[31]
- ③/ ˆ / : [52]
- ④/ ˊ / : [34] ~[45]
- ⑤/ ˋˋ / : [25]



ラオス語（ヴィエンチャン方言）の声調

(4) 声調体系の特徴

(4.1) 声調の出現環境

全ての音節タイプにおいて5声調全てが対立するわけではない。平音節においては、上記5声調全てが対立しうるが、促音節においては、主核母音が長母音・二重母音である場合と主核母音が短母音である場合のそれぞれについて次に示す2声調のみが対立する。

- ・主核母音が長母音・二重母音：/ ː / [21]～[31]（低降調）と/ ˆ / [52]（下降調）
- ・主核母音が短母音： / / [33]（中平調）と/ ˘ / [45]（高昇調）

(4.2) 声調調和

音節が単独で発音されないとき、つまり複音節語の語末以外か、あるいは複音節語の語末の音節でも文中にあるときには、声調は一般になだらかに平滑化される。したがってラオス語文を聴いていると、声調の高低の差があまり感じられないかもしれない。例えば、ある音節が全昇調という上がる声調であっても後続音節が高い音節から始まらない場合は、声調は上がりきらず、逆にある音節が全降調という下がる声調であっても後続音節が低い音域から始まらない場合は、声調は下がりきらない。特に、平音節で中子音字あるいは高子音字の声調記号のない場合の音節の声調は、後続音節の声調に関係なく、常に低平調[22]（単独では一覧表のように上昇調[25]）になる。これを「声調調和」と言う。例えば、

/lǎŋ/	[laŋ25]	ຫ້ງ	「背中」
/lǎŋkhaa/	[laŋ22 khaa34]	ຫ້ງຄາ	「屋根」

(4.3) 軽声音節

複音節語の語末以外、即ち語頭と語中の音節に、短母音/a, i, u/が現れると、単独では現れないCV-という音節が認められる。一般的な音節構造では、母音が短母音である場合には必ず末子音を要求したが、ここでは末子音を欠いているのである。そしてこのとき声調は / / : [33]中平調」となる。これを「軽声音節」と言う。

/latthabǎan/ [lat33 tha33baan25]	ລັດຖະບານ	「政府」
/ʔubátthìhè:t/ [ʔu33 bat45 ti33 heet21]	ອຸບັດຕິເຫດ	「事故」

6. ラオス語の文字と発音

6.1 文字の種類と読み方

ラオス文字は、「子音字」と「母音符号」および「声調記号」からなる。原則として一音一字の表音文字である。ラオス語では伝統的に子音字が文字の中心的存在で、それに「母音符号」と「声調記号」を上下左右のいずれかに付すという考え方であるので、ここでは子音字、母音符号、声調記号という用語を使用する。これらを一定の規則に従って組み合わせ「音節」を表す。

6.2 子音字

子音字には「基本子音字」「複合子音字」の2種類がある。

(1) 基本子音字

基本子音字は、26字である。以下に子音字一覧表を挙げる。文字の順序はアルファベッ

ト順とでもいうべきもので、辞書などはこの順に配列されている。また表で確認できるように、一覧表の上から四行目までは順に、k行、c行、t(d)行、p(b)行とすることができる。読み方は、伝統的に頭子音に/oo/の母音を添えて発音する。

実はこれらの子音字は、声調決定のために3つのグループに分かれている。下表の□で囲ったものを「中子音字」、□で囲ったものを「高子音字」、その他を「低子音字」と言う。先の4.1で、文字は一音一字の表音文字であると述べたが、同じ発音の頭子音字がいくつかある。例えば2番目の **ຂ** と3番目の **ခ** は同じ/kh/である。これらは、片方は高子音字、もう一方は低子音字と呼ばれるものであり、それぞれに伴う声調が異なっている。従って文字を読むに当たってそれぞれの子音字に対し、中子音字と高子音字には、全昇調/ ˊ / の声調、低子音字には高昇調/ ˊ / の声調をつける。例えば、2番目の子音字 **ຂ**/kh/は、/khóo/と、3番目の子音字 **ခ**/kh/は、/khóo/と読む。

子音字一覧表 (表1)

	ກ k	ຂ k ^h	ຄ k ^h	ງ ŋ				
	ຈ c	ສ s	ຊ s	ຍ j				
ດ d	ຕ t	ຖ t ^h	ທ t ^h	ນ n				
ບ b	ປ p	ຜ p ^h	ຝ f ^h	ພ p ^h	ຟ f	ມ m		
	ຢ y	ລ l	ວ w	ຫ h	ອ ʔ	ຮ h		

(2) 複合子音字

前節で、低子音字のうち、同じ発音で声調だけが異なる高子音字があると述べた。ところが一方で、そのような高子音字がない低子音字もある。そのような文字にちょうど対応するような形で、高子音字である **ຫ** と低子音字を組み合わせて表す複合子音字がある。例えば (1) の一覧表で、1行目の2番目の高子音字「**ຂ**」と3番目の低子音字「**ຄ**」は、同じ/kh/で、声調だけが異なるペアであるが、4番目の「**ງ**」には対応する高子音字がない。こ

の「ㄅ」に対応する高子音字が複合子音字「ㄅㄅ」である。そのような文字は次の 6 つである。したがってこれら複合子音字は全て高子音字である。

低子音字：高子音字

ㄱ	ㄲ	ㅅ + ㄲ = ㅅㄲ
ㄴ	ㄷ	ㅅ + ㄷ = ㅅㄷ
ㅇ	ㅈ	ㅅ + ㅈ = ㅅㅈ
ㅁ	ㅂ	ㅅ + ㅂ = ㅅㅂ, ㅅㅃ
ㄴ	ㅅ	ㅅ + ㅅ = ㅅㅅ, ㅅㅆ
ㄹ	ㄷ	ㅅ + ㄷ = ㅅㄷ, ㅅㄹ

最後の 3 つは現在文部省ではそれぞれ左の合体形の方, ㅅㅅ, ㅅㅆ, ㅅㄷ, を使用している。

6.3 母音符号

母音符号には、「基本母音符号」「二重母音符号」「複合母音符号」の 3 種類がある。

(1) 基本母音符号

基本母音は 9 つで、それぞれ長短の対立があるので、基本的な字形は 9×2 で合計 18 になる。以下に母音符号を一覧表にして示す。x 部分は頭子音字の位置を、+ 部分は末子音字の位置を示す。

xㅏ (ㅏ+)	a(?)	xㅑ	aa
ㅑ	i(?)	ㅑ	ii
xㅓ	u(?)	xㅕ	uu
ㅕ	ㅜ(?)	ㅕ	ㅜㅜ
ㅕㅏ (ㅕㅏ+)	e(?)	ㅕㅑ	ee
ㅕㅓ (ㅕㅓ+)	ε(?)	ㅕㅕ	εε
ㅕㅗ (ㅕㅗ+)	o(?)	ㅕㅑ	oo
ㅕㅑㅑ (ㅕㅑㅑ+)	ㅑ(?)	x (ㅕㅑ+)	ㅑㅑ
ㅕㅑ	ㅑ(?)	ㅕㅑ	ㅑㅑ

() 内の文字は、末子音があるときに用いる字体である。例えば、x 部分は頭子音字、+ 部分は末子音字の位置を示しているとする、

(例)	ㅑ	:/ㅑ/	ㅑ	:/kㅑㅑ/	「一も」
	xㅑ+	:/ㅑ/	ㅑ	:/kㅑㅑ/	「太鼓」

この場合、ㅑ も ㅑ も /ㅑ/ を表すが、母音の後に末子音が続くときは ㅑ ではなく、ㅑ の文字の方を使用することになる。

また、短母音字の発音に必ず(ʔ)があるが、それは末子音字がなく短母音字で終わっている音節の場合は、原則として常に末尾に/ʔ/を伴うからである。例えば、

(例) ɤ /khúʔ/ 「落ちる」
 ɤŋ /khút/ 「掘る」

この場合、ɤ は末子音字がないので最後に/ʔ/を伴うが、ɤŋ は別の末子音を表す末子音字 ŋ/t/があるので、声門閉鎖音/ʔ/を伴わない。

(2) 二重母音符号

二重母音は 3 つで、基本母音と同様に長短の対立があるので、文字としては 3×2 で合計 6 文字になる。() 内の文字は、基本母音符号と同様、末子音字があるとき、形が変わる場合である。また、短二重母音字は末子音字を伴わず、常に語尾に/ʔ/を伴う。

ɕ̥ɤ	iaʔ	ɕɤ (ɕɤ+)	ia
ɕ̥ə	uaʔ	ɕə	ua
ɕ̥ɛ	uaʔ	ɕɛ (ɕɛ+)	ua

(3) 複合母音符号

次の 4 文字は「母音+末子音」の文字である。これを複合母音符号と言う。

ʔx, ʔx ay, ɕ̥ŋ am, ɕ̥ŋ aw,

6.4 声調記号

(1) 声調記号

声調記号は 4 つで、各声調記号の種類と呼び名 (x 部分は頭子音字を表す) は次のとおりである。

˘ /mây ʔèek/
 ˙ /mây thóo/
 ˚ /mây ǎi/
 † /mây cáttawáa/

後の 2 つは頭子音字が中子音字の場合で、しかもオノマトペや感嘆詞など、ごく限られた場合に使用され、通常は ' と ˚ の 2 つであると考えてよい。

(2) 声調規則

各文字で表された音節がどのような声調であるかは、音節単位ごとに以下の各要素の組

み合わせで決まる。

- ①頭子音字の種類（中子音字・高子音字・低子音字のいずれか）
- ②音節の種類（平音節・促音節のいずれか）
- ③（i）平音節のとき→声調記号の種類（なし・'・´ のいずれか）
（ii）促音節のとき→母音の長さ（長母音・短母音のいずれか）

まず、読みたい音節の頭子音字の種類「中子音字・高子音字・低子音字」に着眼する。いずれに属するかによって同じ声調記号を用いても声調が異なるからである。例えば、声調記号が´ の場合を例にとると、次のようになる。

頭子音が中子音字のとき	နာ	/káa/	（下降調）「勇ましい」
頭子音が高子音字のとき	ဆာ	/kháa/	（低降調）「殺す」
頭子音が低子音字のとき	ဆာ	/khâa/	（下降調）「商売する」

頭子音字は 6.2 (1) の基本子音字一覧表で示したように、次の 3 グループに分かれている。

(a) 頭子音の種類別一覧表

中子音 :	n, ခ, ဂ, ဓ, ဝ, ပ, ဝ, ဘ, ဝ
	k c d t b p y ?
高子音 :	ခ, ဆ, ဖ, ဖ, ဖ, ဖ, ဖ, ဖ, ဖ, ဖ, ဖ, ဖ, ဖ, ဖ
	kh s th ph f h η j n m l w
低子音 :	ခ, ခ, ဓ, ဝ, ဝ, ဝ, ဝ, ဝ, ဝ, ဝ, ဝ, ဝ, ဝ
	kh s th ph f h η j n m l w

次に音節の終わりを見る。それによって音節の種類が「平音節」か「促音節」かが判別できる。「平音節」は、音節末が/m,n,η,y,w/か長母音もしくは二重母音のいずれかで終わる音節で、「促音節」は、音節末が/p,t,k,ʔ/のいずれかで終わる音節のことを言う。平音節の場合は、どの声調記号を用いているかによって声調が決まる。一方、促音節の場合は、さらにその音節の母音が短母音か長母音かによって声調が決まる。末子音について文字を用いて示すと、以下のようになる。

(b) 音節の種類

平音節 : မ, မ, ဂ, ဝ, ဝ, ဘ, ဝ, ဝ, ဝ, 長母音字・二重母音字で終わるもの
 促音節 : ဝ, ဂ, ဓ, 短母音字で終わるもの

各音節と声調記号との規則を表に表すと以下のようになる。

(c) 声調規則表

音節の種類	平 音 節			促 音 節	
	なし	'	ˆ	長母音	短母音
中子音	/ ˘ /	/ /	/ ^ /	/ ˘ /	/ ˘ /
高子音	/ ˘ /	/ /	/ ˘ /	/ ˘ /	/ ˘ /
低子音	/ ˘ /	/ /	/ ^ /	/ ^ /	/ /

(3) 二重子音字連続形の声調

見かけ上の二重子音字がある。それは次の 13 である。

ကဝ, ဥဝ, ဓဝ, ဌဝ, ဍဝ, ဎဝ, ဏဝ, ဏဝ, ဏဝ, ဏဝ, ဏဝ, ဏဝ, ဏဝ

見かけ上と言ったのは、実際の発音は、二重子音連続ではなく、二音節語となるからである。つまり、実際の読み方は、「/第一頭子音+u/ (=軽声音節) +/第二頭子音w+長母音aa/」として実現する。そしてその際の声調は、第一頭子音字の種類の声調を第二音節にかぶせる。

ခဝၢ /khwǎa/ ではなく /khuwǎa/ 「右」
 ဓဝၢၢ /khwáay/ ではなく /khuwáay/ 「水牛」

6.5 文字を発音

まず音節の初めを見て、次ぎに終わりを見て、そして真ん中を見るという要領で読む。

(a) လၢဝ : 頭子音လ/1/は低子音 (6.2 (1) 表), 末子音はဝ/w/で終わっているので平音節 (6.4 (2) (b) 表), 真ん中の母音字ာは/aa/で声調記号が付いていないので, 声調は規則表 (6.4 (2) (c) 表) でいうと下段の一番左寄りの声調「中高調」/ ˘ /をとる。したがって/láaw/と読み, 意味は「ラオス」。

(b) ပီၤမ : 頭子音ပ/p/は中子音, 末子音はမ/m/で終わっているので平音節, 真ん中の母音字ိは/i/で声調記号が ˆ なので, 声調は規則表 (6.4 (2) (c) 表) でいうと上段の左から 3 番目の声調「下降調」/ ^ /をとる。したがって/puím/と読み, 意味は「本」。

(c) ရီၤဂီၤမ : まず最初の音節。頭子音ရ/r/は低子音, 末子音はမ/m/で終わっているのは平音節, そしてその母音字ိ/i/の上にある声調記号が ' なので, 声調は規則表 (6.4 (2) (c) 表) でいうと下段の左から 2 番目の声調「中平調」/(なし)/をとる。したがって/ríim/と読む。第二音節の頭子音ဂ/g/は中子音, 末子音はမ/m/で終わっているのは平音節, 真ん中の母音字ိ/i/は/u/で声調記号が ' なので, 声調は規則表 (6.4 (2) (c) 表) でい

うと上段の左から 2 番目の声調「中平調」/(なし)/をとる。したがって/pun/となり、全体は/pi:pun/と読む。意味は「日本」。このように声調記号が'のときは、子音字の種類に
関係なく、全て「中平調」/(なし)/になると考えてもよい。

7. ラオス語のプロソディー：イントネーション

ラオス語文において、イントネーションの音韻的な取り扱いについては、声調言語であるため、なお一層の検討が必要と思われる。ここでは平叙文と疑問文において次のような傾向が認められることのみふれておく。

(1) 平叙文

平叙文では、文末の「自立語」、あるいは「付属語+自立語」部分に、特に声調保持の傾向が強い。言い換えると一般に、文中においては、声調は前述の記述にかかわらず、なだらかに平滑化される傾向があるが、文末の位置ではそのようなことはなく、むしろ各声調の特徴が誇張されるように聞こえる傾向すらある。

(2) 疑問文

文末に置くことによって疑問文をつくる疑問助詞と否定辞は/boo/[boo33]という同じ語を使用するが、疑問助詞として文末に置くと、[boo34]と発音される。つまり「はい」あるいは「いいえ」の答えを要求する諾否疑問文の場合、尻上がりに少し上昇する傾向があると言することができる。

8. ラオス語音声の多様性

以上、ラオス語の発音について述べた。しかし、ラオス語の音韻体系および音声学的特徴については、現在でも揺れている。例えば、長母音から短母音へ移行する語が挙げられる。さらには発音が変化するにつれ、正書法も変わっていく。即ち長母音から短母音へ発音移行するのに伴い、文字も長母音字から短母音字に変わっていくのである。例えば、

ຍູງ → ຍູງ /núŋ/ 「蚊」

ເທິງ → ເທິງ /théŋ/ 「上」

もう一つは声調が変わる例が挙げられる。なかでもタイ語の影響を受けて、声調もタイ語的な声調に変化し、それに伴って声調記号も変わるのである。例えば、

ເລື້ອຍໆ → ເລື້ອຍໆ /lúʔay lúʔay/ 「ずっと」

このようにラオス語においては、発音の変化と共に、正書法もそれに柔軟に対応するべく変化する。これもまたラオス語の特徴の一つであるといえることができるであろう。ラオス語の発音の変化、それに伴う正書法の変化は今後もしばらく続くと思われる。

参考文献

Arthur G. Crisfield (1978) : Sound Symbolism and the Expressive Words of Lao,

Ph.D.Dessertation, University of Hawaii, Honolulu.

上田玲子 (1994) : 「現代ラオス語 ヴィエンチャン方言の音韻体系」『言語研究』第 106 号, pp.95-115, 日本言語学会.

鈴木玲子 (1999) 「タイ語とラオ語の語彙比較研究」『アジア・アフリカ文法研究 27』

pp. 115-130, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

鈴木玲子・他 (2002) 「CDエクスプレス・ラオス語」白水社.

鈴木玲子 (2003) 「第 10 章:言語」ラオス文化研究所・編『ラオス概説』pp. 273-292, めこん.